

第四十九次南極観測の航海疑似体験記

宇敷 辰男

JR津田沼駅から東京湾へ向って広がる工場地帯を抜け、ビール工場の前の船橋港の埠頭に元南極観測船「しらせ」が係留されている。七月初めその船内を見学し航海を疑似体験した。

一九五七年に第一次観測隊が「宗谷」で南極に到達し昭和基地が完成。以来「宗谷」が六回「ふじ」が十八回、そして「しらせ」が二十五回活躍し第四十九次南極観測を最後に退役した。

元海上自衛隊の方から当時の記録映像も使って説明を受け広い船内を見て廻った。しらせ(一一六〇〇ト)は、一般の乗員一七〇名を乗せ平成十九(二〇〇七)年十一月十四日晴海ふ頭を出航し二十八日にオーストラリア・フリーマントル港に入港した。これとは別に観測隊員六十名が十一月二十八日成田空港を出発し、翌二十九日に合流し乗艦した。生鮮品等を積込み、十二月三日南極に向けて出航し、五日に南緯四十度線を超え「暴風圏」に突入すると船は大きく動揺する。暴風圏を乗り越えるのに五日程かかり、過去には最大で左に五十三度、右に四十一度も傾いたことがあるそうだ。尋常な揺れではない。

艦内では、調理員が十名乗船し毎週金曜は「しらせカレー」が出る。医師は乗船するけれど、理容師はいないので隊員同士が髪を切る「恐怖のタイガーカット」理髪室が用意されていた。

十二月十四日流水域に入ると「白夜」になり、海面が厚い氷に閉ざされた世界が二十四時間見渡せる。しらせは厚さ一・五メートルの砕氷能力をもっているが、それ以上の厚い氷は、操舵室の中央で三軸のスクリューを操作し、鉄板の厚さ四十五mmの船体をバックさせ、最大馬力で氷に体当たりし乗り上げ、自重で氷を砕く。これを千五百回近く繰り返す、昭和基地へ進んで行った。

元南極観測船は現在「SHIRASE」という名称に変わり、既にスクリューは外されている。南極に行ったことも、これから行くこともないけれど、船内で南極の氷に手で触れられ、見どころ満載の南極観測の旅を堪能することができた。